

主 題：兄たちに裏切られた人—ヨセフ

聖書箇所：創世記 37－50章

王に次ぐエジプトナンバー2の人物、偉大な権力者、そして、偉大な信仰者、これが今日私たちが学ぼうとしているヨセフという人物です。創世記37章から50章までの非常に長い箇所がこのヨセフのことが記されています。偉大な信仰者ヨセフ、それはヘブル人への手紙の中の「信仰の勇者」の箇所にも彼の名が連ねられていて、そのことが称えられています。しかし、このヨセフも元から信仰の勇者であったわけではありません。いろいろなことを通して神が訓練してくださったのです。確かに、ヤコブが言うように「**信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。：4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。**」（ヤコブ1：3，4）と、まさに、このことは私たち皆、経験しているはずです。いろいろな試練を通して、いろいろな訓練を通して、私たちの信仰は成長して行きます。このヨセフも様々な試練、訓練を主からいただき、そして、それを通して彼は見事に主に喜ばれる信仰の勇者へと成長して行くのです。今日はこのヨセフについて書かれているこの箇所から、彼自身が様々な試練にどのように立ち向かって行ったのか、どのように彼が成長して行ったのか、このようなことを通して彼が何を学んだのか、このヨセフについてごいっしょに学んで行きましょう。

ヨセフはいろいろな試練を経験しました。特に、この37章から見て行くと、三つの大きな試練に彼が直面していることを教えられます。一つ目は愛する者たちに裏切られるということです。それだけでも大変なことです。二つ目の試練はぬれぎぬを着せられるのです。悪いことをしていなかったのに、無実の罪、冤罪によって彼は訴えられてしまうのです。そして、三つ目に彼は期待を裏切られてしまいます。これから、その一つ一つを簡単に見て行きます。

◎ヨセフが遭遇した試練

1. 愛する者に裏切られる

創世記37章を見ると、ヨセフは彼の兄たちから裏切られたことを教えています。父ヤコブは兄たちの様子を見て来てくれと言って、ヨセフをシェケムの地へ送り出します。彼らがいたヘブロンから大体80キロ北へ上がった所です。兄たちは羊を追ってシェケムへと出かけていたのです。ヨセフは喜んでその地に行きますが、シェケムに着いたときには彼らはもうそこを立ってもう少し北、20数キロ先のドタンへ行ったと聞き、そこへと追って行くのです。そこで兄たちに会うのですが、兄たちの方が先にヨセフを見つけるのです。それで兄たちは日頃の恨みを晴らす絶好の機会がやって来たと喜びます。というのは、ヨセフは兄たちに嫌われていたのです。この当時、ヨセフは17歳であったと言われています。なぜ、彼は兄たちから嫌われていたのでしょうか？みことばは私たちに三つのことを教えてくれます。

（1）兄たちの悪口を父ヤコブに告げていた＝特に、ヤコブのそばめの子どもたちの悪いことを父親に告げていたことが37章に記されています。37：22に「**これはヤコブの歴史である。ヨセフは十七歳のとき、彼の兄たちと羊の群れを飼っていた。彼はまだ手伝いで、父の妻ビルハの子らやジルパの子らといっしょにいた。ヨセフは彼らの悪いうわさを父に告げた。**」とあります。この「ビルハ」というのはヤコブの妻ラケルの女奴隷でした。そして、「ジルパ」はヤコブの妻レアの女奴隷だったのです。ビルハはダンとナフタリを生みジルパはガドとアシェルを生んだ、この4人の子どもたちとヨセフはいっしょにいたのです。詳しいことは記されていませんが、少なくとも、彼らに関する良くないことを父に告げたのです。もしかすると、彼らは与えられた仕事に熱心ではなかったのかもしれませんが。彼らは自分たちの境遇にわだかまりをもって、自分たちは本妻の子どもではないからと責任を果たすことに熱心でなかった、そのようにも考えられますが、神の前には皆同じです。神によって造られいのちが与えられ神に忠実に歩むという同じ責任を負っているのです。ですから、このようなヨセフを彼らが嫌ったのは当然のことです。もちろん、これはヨセフが悪かったというよりも、彼らが悪かったのです。ヨセフに悪く言われるようなことをしなければよかったのです。兄たちがヨセフを嫌っていた二つ目の理由は、（2）父親のヤコブがヨセフを溺愛したこと＝この家族を見るとその中に偏愛というものの特徴としてあります。ヤコブはヨセフを非常に愛しました。ですから、ヨセフは甘やかされた環境の中で育ってきたと言えます。みことばが教えることは、他の兄弟よりも高価な着物を着せられています。37：3「**イスラエルは、彼の息子たちのだれよりもヨセフを愛していた。それはヨセフが彼の年寄り子であったからである。それで彼はヨセフに、そでつきの長服を作ってやっていた。**」、この当時の着物は殆どが無地で半袖で丈も膝くらいのものでした。ところが、ヨセフがもらったものは丈の長いものでした。「**そでつきの長服**」とありますが、これがどのようなものかはっきりとはしません。ある人は、これはカラフルでバビロンから送られてきたような高

価な綾織の着物だったと言います。また、丈がくるぶしまである長い服だったとか、装飾品の付いた上着ではなかったとか、定かではありません。いずれにせよ、分かっていることは他の兄弟たちが着ているものとは別のものを、ヤコブはヨセフに与えていたのです。このような偏愛が問題をもたらすのは当然です。案の定、この家庭でも兄たちが弟のことを妬んだというのは、私たちも十分に理解できます。父親は彼を特別に愛した、父親の愛を独占していたと言えるかもしれません。（3）自分が見た夢を2回、兄たちにそして、父ヤコブがいるところで話す＝そのことが37章に出て来ます。7節「**見ると、私たちは畑で束をたばねていました。すると突然、私の束が立ち上がり、しかもまっすぐに立っているのです。見ると、あなたがたの束が回りに来て、私の束におじぎをしました。**」、9節「**ヨセフはまた、ほかの夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また、私は夢を見ましたよ。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいるのです。」**と言った。」、原文でも「**見ると**」ということばが3回出て来ます。そういうところからヨセフが得意になってこの夢の話をしたのではないかと思われます。なぜ、この話をしたのでしょう？もしかすると、ヨセフ自身、自分が他の兄弟よりも祝されている、特別だという思い上がりがあったのかもしれませんが。彼が語った夢、一つ目は畑で束がみな自分に向かっておじぎをしたというもの、もう一つは、星たちが自分を拝んでいる、「**太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいる**」と太陽はヤコブ、月は母親のリベカのこと、十一の星は兄弟たちのことです。このようなことを聞いて兄弟たちがますます、いったいおまえは何者だという思いをもつというのはあたりまえのことです。ですから、兄たちはヨセフがやって来るのを見たとき、これは絶好の機会だ、父親もそばにいないし、さあ今までのうっぷんを晴らそうと、そのような思いを持つのです。この37章を見ると、兄たちのヨセフに対する怒り、憎しみが非常に大きかったことが見て取れます。というのは、18節には「**彼らは、ヨセフが彼らの近くに来ないうちに、はるかかなたに、彼を見て、彼を殺そうとたくらんだ。**」とあります。ところが、長男のルベンはそれに反対して、殺さないで穴に閉じ込めておこう、後でヨセフを逃してやろうと思ったようです。でも、ルベンがいない間にそこを通りかかったイシュマエル人の商人に、四男のユダの考えによって、彼を売り渡すことにしそのようにしたのです。ヨセフはこのことをどのように思ったでしょう？まさか、自分の兄たちが自分を売り飛ばしてしまうなど…。愛する者たちに裏切られてしまったことは彼自身にも大きな悲しみだったことでしょう。

そして、39章を見ると、エジプトに連れて行かれたヨセフの様子が記されています。パロの廷臣で侍従長ポティファルという人が、イシュマエル人からヨセフを買い取るのです。神が彼を大いに祝したことが書かれていますが、その後で、このポティファルの妻がヨセフに言い寄って来るのです。7節からそのことが記されています。ヨセフは非常に成功しているし、6節には「**…しかもヨセフは体格も良く、美男子であった。**」とある通りです。こういった誘惑をこの妻から受けるのですが、ヨセフはそれに屈することなく自分のきよさを保ち続けるのです。しかし、彼女はヨセフが自分の思い通りにならないのを見て、彼を訴えるのです。

2. ぬれぎぬ

14節「**彼女は、その家の者どもを呼び寄せ、彼らにこう言った。「ご覧。主人は私たちをもてあそぶためにヘブル人を私たちのところに連れ込んだのです。あの男が私と寝ようとしてはいつて来たので、私は大声をあげたのです。」**」、17節「**こうして彼女は主人に、このように告げて言った。「あなたが私たちのところに連れて来られたヘブル人の奴隷は、私にいたずらをしようとして私のところにはいつて来ました。」**と、これを聞いた主人は当然怒りに燃えてヨセフを捕らえて王の囚人が監禁されている獄に入れたのです。恐らく、この獄はポティファルの家の中にあった監獄であったようです。いったい、自分が何をしたのか、どんな悪いことをしたのか、彼は無実の罪で閉じ込められてしまったのです。どうして？と思うこともあったでしょう。私は何も悪いことはしていない…と。この監獄というのは大変な状況でした。私たちが想像する今の刑務所のようなではありません、食べ物を与えられることもなくトイレもないのです。病気も発生するし飢え死にする人もたくさんいた、酷い環境の中にヨセフは入れられてしまうのです。

3. 期待を裏切られてしまう

40章になると、自分が捕らえられているところに、エジプト王パロの献酌官と調理官が王に罪を犯したということで、献酌官長と調理官長がヨセフと同じ監獄に入れられたことが出て来ます。そして、彼らは夢を見ました。ヨセフはその夢の解き明かしをしたところ、そのとおりになるのです。そして、この献酌官長が自由にされたときに、ヨセフはその献酌官長に対して、40：14－15「**あなたがしあわせになったときには、きっと私を思い出してください。私に恵みを施してください。私のことをパロに話してください。この家から私が出られるようにしてください。：15** **実は私は、ヘブル人の国から、さらわれて来たのです。ここでも私は投獄されるようなことは何もしていないのです。**」と一生懸命訴え出るのです。何とかここから出たいと。もちろん、この献酌官長はそのことを約束したのでしょうか。しかし、23節にあるように「**ところが献酌官長はヨセフのことを思い出さず、彼のことを忘れてしまった。**」のです。あれだけお願いしたの

にと、しかも、41:1を見ると「それから二年の後、…」とあるように2年間忘れられてしまうのです。ヨセフの中では、今日迎えが来てくれるのでは？今日私は解放されるのでは？と期待しながら待つて、しかし、待つても待つてもその日が訪れないのです、2年間も…。

ですから、ヨセフが17歳から経験してきた様々な試練は、愛する者から裏切られてしまうし、ぬれぎぬを着せられてしまうし、そして、やっとここから解放されると期待していたのに、それは2年間も忘れられてしまうのです。このヨセフのような試練は私たちにはないかもしれませんが、しかし、少なくとも、私たちもよく似た経験をするはずで、人間関係の問題、もしかすると、家族の中にいろいろな問題があるかもしれない、正しいことをしているのに責められたり、無実の罪で訴えられたり、自分の思い通りに物事が進んで行かない…と、大なり小なりそのようなことを私たちは経験しますし、それが私たちの人生だといっても過言ではないでしょう。聖書が興味深いのはどの時代の人も私たちと同じようなことを経験していることが記されていることです。私たちがしっかり見て行かなければいけないことは、このような試練の中にあつてヨセフがこれからどのようにそれらに立ち向かつて行ったのかです。彼は信仰の勇者だったのです。その勇者へと変えられて行くために神は訓練をされました。これが訓練の場だったのです。

◎神の訓練の中でヨセフはどのように学び勝利して行ったのか？

彼はこのような試練に勝利して行きます。彼の勝利の秘訣をこれから見て行きます。一つは神を恐れることであり、もう一つは神を信頼することです。この二つがヨセフが行なったことであり、そして、どの時代であれ、どの国の人間であれ、私たち一人ひとりが学ばなければならないことがそこにあるのです。

1. 神を恐れること

ヨセフは神を恐れ続けました。彼は主を愛して主を敬い続けた、なぜそう言い切れるのか、その証拠を見て行きましょう。

(1) 奴隷として主人ポティファルに忠実に仕えた

彼がエジプトに売られて来たとき、彼はポティファルのところで奴隷として主人に一生懸命仕えています。だから、神はそれを祝され、主人もそれを認めるのです。先に見てきたこの4人の兄たちのこと、彼らには悪い噂があった、はっきりしませんが彼らには怠慢があったのかもしれませんが、しかし、このヨセフは愚痴や不満や文句を言っただけで何もしないのではなく、彼はどこにあつても主を恐れる者として、主を愛する者として、主の前に喜ばれることを一生懸命やろうとしました。彼は勤勉だったのです。主人に刃向かったり逆らうことなどなく、忠実に従い与えられている働きを忠実に行ない続けているのです。もし、私たちも同じように神を敬うのなら、この地上にあつて、この社会にあつて、神が与えてくださっている働きを忠実に果たすことです。私たちはこの地上にあつても大きな責任をもっています。どんな働きであつても私たちは熱心に主のために喜んで最善を尽くすことです。なぜなら、私たちのすべてを神は見えておられるからです。このヨセフはどんなときでも主が喜ばれることを考え、それを選択しようとしています。

(2) 神の前に正しく歩み続けようとした

39:8-9「しかし、彼は拒んで主人の妻に言った。「ご覧ください。私の主人は、家の中のことは何でも私に任せ、氣を使わず、全財産を私の手にゆだねられました。:9 ご主人は、この家の中では私より大きな權威をふるおうとはされず、あなた以外には、何も私に差し止めてはられません。あなたがご主人の奥さまだからです。どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができますでしょうか。」、ここを見ても明らかのように、ヨセフはだれも見えていなくても神は見えておられる、私はどうして神の前に罪を犯すような間違った選択をすることができようかと言っています。彼は神に喜ばれることを選択しようとしていました。なぜなら、神を恐れていたからです。神の目が常に自分に注がれていることを知っていたからです。神の目を逃れてどこにも行けないことを知っていた、自分には大きな責任があることを彼は知っていたのです。だから、彼はそのような罪を犯すことによって神を悲しませることがないように、神に逆らうことがないように、いつも自分のことを見ておられる神の前に正しく歩み続けて行こうとしたのです。39章の2, 3節、後半の21, 23節にも同じことばが出て来ます。「主がヨセフとともにおられたので、…」

「主が彼とともにおられ、…」「主はヨセフとともにおられ、…」「それは主が彼とともにおられ、…」と。主がともにおられたというのは、ヨセフの歩みが主の前に正しかったからです。ヨセフは主の臨在をいつも覚え主の目をしっかり見据えてその方の前に正しいことを継続して行なおうとした、勤勉であつたしそして、罪を犯すことなく罪から離れようと歩み続けたのです。その結果、彼は奴隷として売られたときも、ポティファルの家にあつても、そして、監獄にあつても、主人から大きな祝福をもらっているのです。皆、彼を認めたのです。皆、彼に大きな責任を託して行くのです。

(3) どんなときにも神の栄光を現わすことを考えた

40：8を見ると、先の献酌官長と調理官長が夢を見たとき、ヨセフがその夢の解き明かしをするのですが、「ふたりは彼に答えた。「私たちは夢を見たが、それを解き明かす人がいない。」ヨセフは彼らに言った。「それを解き明かすことは、神のなさることではありませんか。さあ、それを私に話してください。」と言っています。今度はパロの前に立っても彼は同じことを言います。41：16「ヨセフはパロに答えて言った。**「私ではありません。神がパロの繁栄を知らせてくださるのです。」**と、ヨセフは自分にはこんなことができますと、自分の働きを彼らに話して自分に栄光を帰することもできたのですが、ヨセフはそうにはしません。夢の解き明かしをするのは神なのだ、神が働いてくださると、栄光を受けるべき方に栄光を帰しているのです。私たちクリスチャンも働きをするときは自分がしているのではありません。私が立派だ、私が信仰深いからと、とんでもない、神の恵みによって私たちはさせていただいているに過ぎないのです。栄光を受けなければいけないのは神であり、誉められなければいけないのは神なのです。でも、私たちにはいろいろな誘惑があつて、もっと自分が誉められたい、人からよく見られたいとなりがちですが、ヨセフにはそのようなことがなかったのです。このような様々な試練を通して栄光を受けなければいけないお方、栄光を受けるにふさわしいお方、誉められるのにふさわしいお方はただ一人、この神であると言うのです。まさに、非常にへりくだった人を私たちはここに見るのです。だから、神はそのような人を高く上げて大切な務めに就けたのです。新約聖書の中でもマルコの福音書の10：43には**「しかし、あなたがたの間では、そうでありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」**とあります。神が憎まれるのはプライドです。神が憎まれるのは、私たちが人より優れているというそのような高慢な態度です。神はへりくだった者をご自身の目的のためにお用いになるのです。まさに、このヨセフがそのような人物であったことを私たちはここでも見ることができるのです。41：38にはパロがヨセフのことをこのように言っていることが記されています。**「そこでパロは家臣たちに言った。「神の霊の宿っているこのような人を、ほかに見つけることができようか。」**、ですから、このようなことから明らかにヨセフは、神を恐れ神の前に正しいことを継続しようとしていた、そのような人物であったことを見て取ることができます。

2. 神を信頼した

このような試練に彼は立ち向かって行くのですが、彼は神を恐れるだけでなく神を信頼して行きました。45章から見て行きます。皆さんご存じのように、この後、神はヨセフを大いに祝してパロに次ぐエジプトナンバー2の人物に彼を召します。そのような大きな責任と祝福を神はヨセフに与えるのですが、この45章、兄たちが自分のところにやって来ます。そして、兄たちに自分自身のことを明らかにする箇所がここに出てくるのです。4節の後半から**「私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。：5 今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。：6 この二年の間、国中にききんがあつたが、まだあと五年は耕すことも刈り入れることもないでしょう。」**と続きます。7節の後半から**「また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。」**と自分がエジプトに先に遣わされた理由を述べています。8節にも**「だから、今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。神は私をパロには父とし、その全家の主とし、またエジプト全土の統治者とされたのです。」**と、つまり、ヨセフはここですべてのことを神が導いておられると言っているのです。だから、私たちは日々の生活において、どうして？と思うようなことがあつたとしても、すべてのことを導いておられる神に信頼をおいて歩んで行くべきなのです。まさに、そのことを神は教えようとされたのです。覚えておられますか？37章で兄たちがヨセフを殺そうとしたとき、37：20**「さあ、今こそ彼を殺し、どこかの穴に投げ込んで、悪い獣が食い殺したと言おう。そして、あれの夢がどうなるかを見ようではないか。」**と言っています。殺してしまったら、彼が今まで言ってきたこと、自分たちが彼に仕えるというその夢がどうなるのか見てみようと言うのです。兄たちはヨセフを殺してしまつて彼の夢が実現しないようにと彼らなりに行動を起こそうとするのです。ところが神の知恵は今私たちが見て来たように、すべてのことを導いておられるのです。エジプトへ彼が売られて行ったことはだれが考えても絶望です。いったいどうなってしまうのだろうと。ところが、彼をイシュマエル人から買ったのはパロの役人の一人、パロが信頼を置いているポティファルでした。これは偶然でしょうか？違います。神の摂理があるのです。ポティファルの監獄に入れられた、どうなるのだろう？ここで息絶えてしまうのだろうか？周りは悲惨な状態です。その中で絶望することもできましたが、監獄に入ることによってパロに仕える献酌官長に会うのです。監獄に入るなんてだれが見ても最悪の状態ですが、そこに入ることによってこのようなパロが信頼を置いている人物に会うのです。献酌官長はパロの信頼を得ている人物です。この人の一番の働きは、王に飲み物が捧げられたとき自分の掌でそれを毒見してその上で王に渡すのです。そのように大切な役割をもっていた人物です。人々からも尊敬を得ていました。ヨセフがこの人物に出会つたのはパロの宮廷ではなかった、獄中でした。この献酌官長もそこで悩んでいました。助けが必要だったのです。神はそのような場を用意されてヨセフ

がそこで彼に出会うようにされたのです。ですから、人間的に見て絶望と思えることも神の前にはそうではなかった、神のすばらしい計画があったのです。2年間、ヨセフは忘れられてしまった、でも、今度はパロが問題を抱いたのです。だれもパロの夢を解き明かすことができなかった、パロが一番問題を感じているときに、この献酌官長はヨセフのことを思い出すのです。

皆さん、神はこのようなことを通して、ヨセフに大切なことを教えようとされました。それは、人間的に見て確かに絶望と思えるようなことでも、主権者なる神はご自身の完全な知恵をもってすべてのことを導いておられるということです。神に無駄なことはないのです。神には失敗ということがないのです。私たちが失敗を選択するのです。神の完全なみこころよりも自分の不完全な願いを優先することによって…。ここでヨセフは大切なことを神から教えられます。私の神は完全な知恵をもっている、すべての完璧な支配者だ、この方に任せて行くことができると。約束のものを手に入れるために必要なものは忍耐だと、ヘブル人への手紙で教えています。確かにそうです。大変な状況の中でも、私たちに必要なことは神を信頼して神に期待し続けることです。私たちに必要なことは神の前に正しく歩み続けることであり、神に期待を置き続けることです。神は必ずみこころを為して行かれるのです。

ヨセフが兄たちに裏切られて、エジプトに売られて、エジプトのナンバー2になるまで13年の月日を費やしています。彼は30歳になりました。神はこの13年間を使ってヨセフを鍛えたのです。様々な試練に合わせることによって、彼が常に主を恐れて、常に主を信頼する者へと成長するように、神は彼を訓練されたのです。

◎ヨセフはどのように変えられたのか

1、信仰の人になった

41:45に「**パロはヨセフにツァフェナテ・パネアハという名を与え、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテを彼の妻にした。こうしてヨセフはエジプトの地に知れ渡った。**」とあります。そして、二人の子どもをもうけます。それは41:50から「**ききんの年の来る前に、ヨセフにふたりの子どもが生まれた。これらはオンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテが産んだのである。:51 ヨセフは長子をマナセと名づけた。「神が私のすべての労苦と私の父の全家とを忘れさせた。」からである。:52 また、二番目の子をエフライムと名づけた。「神が私の苦しみので私を突り多い者とされた。」からである。**」と、この二人のこどもの名前には意味がありました。ここに記されているように、マナセは神が彼の悲しみを忘れさせてくださったという意味です。エフライムは彼がこのエジプトの地で神によって大いに祝され栄えさせていただいたという意味です。ということは、ヨセフがマナセという名前を付けたときに、ヨセフはそれまでの悲しい経験を忘れていたのではないのです。悲しい経験として彼の記憶の中にあるのです。しかし、それは実際に自分の心の中に残っているけれど、彼はこれらすべてのことが神の計画のうちにあった、神の摂理であることを悟り、そのことに確信をもつのです。42:6, 9に出て来ます。6節「**ときに、ヨセフはこの国の権力者であり、この国のすべての人々に穀物を売る者であった。ヨセフの兄弟たちは来て、顔を地につけて彼を伏し拝んだ。**」9節「**ヨセフはかつて彼らについて見た夢を思い出して、彼らに言った。「あなたがたは間者だ。この国のすきをうかがいに来たのだろう。」**」。この後、兄弟たちにそのことを話します。まさに、ヨセフが見た夢が実現するのです。ですから、ヨセフは大変な悲しみを経験していて、その様々な悲しみを自分の兄たちが犯した罪を何とか忘れよう、考えないようにしようと努力したのではなくて、その問題を神に託すのです。神に解決を求めようとするのです。だから、彼は神の前に正しいことを行ない続けて行こうとするのです。私たちがしっかり覚えなければいけないことはここです。私たちはいろいろな嫌なこと、悲しいこと辛いことを経験する中で、ときに間違っってしまう。怒りをもってしまったり、憎しみをもってしまったり…。そこには解決はありません。それらを考えないようにしようと一生懸命努力しても、問題の解決はそこにはありません。では、どうするのか、私たちはそのことをすべてご存じである神にゆだねて、神さま、私はこの中で正しいことを選択しましょう、人は私を誤解するかもしれない、でも、私は彼らに対して怒りをもつのではなく、あなたの前に正しいことをして行きます、彼らに正しい態度で接しましょう、人は私に辛いことを言うかもしれないけれど、言い返すのではなく、私はあなたを愛するゆえにあなたの前に正しいことを行なって行きましょう、彼らを愛して行きましょう…。ヨセフは兄たちの罪を恨んでいませんと言っています。50章でヤコブが死んだ後兄弟たちは皆恐れます。50:15「**ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪の仕返しをするかもしれない。**」と言った。」と、ところがヨセフはこのように言います。50:20「**あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。**」、ヨセフは悪に悪で立ち向かったのではなく、神にゆだねて神の前に正しいことを行ない続けようとしたのです。これが私たち信仰者の正しい問題の解決方法、対処方法なのです。私たちは罪多き世の中に生きています。罪深い自分がそこにいます。このような世にあって私たちはいろいろな問題に遭遇します。でも、ヨセフは様々な試練の中で、苦しい辛い経験の中で、彼は神の前に正しいことをやり続けて行こ

うとしました。彼は神を恐れるからです。どんな時でも神を信頼して生きたからです。今の私たちに必要なことも実はそのことです。どんなときでも私のすべてのことをご存じであり、私の周りに起こっているすべてのことをご存じである神にゆだねることができるし、そして、ゆだねた後、私たちの責任はその神に対して私はどのように選択し、どのように生きて行くかです。間違った選択をすることもできます。彼らを恨んだり彼らの悪口を言うこともできます。

非常に面白いことがあります。ポティファルの妻のことをよく見てください。彼女の罪を見たとき、彼女は自分の思い通りにならないのでヨセフを訴えるのですが、その方法は、彼女は自分の家の者たちを集めて皆に言います。彼女は自分の仲間を作って相手を責めるのです。私たちが自分自身に問いかけたとき、これと同じようなことをしていないかということです。このような選択もできます。しかし、これが神に喜ばれないことは明らかです。ヨセフは兄たちを訴えていません。ポティファルの妻を訴えていません。彼はすべてのことを神に任せて正しいことを選択し続けようとしたのです。だから、彼は神に大いに祝われて神に大いに用いられたのです。

ヨセフという一人の人物、私たちが大いに学ばなければならない信仰者です。私たちはどうでしょう？あなたがどんな試練に直面しておられるのかは分かりませんが、どのような試練であっても神はご存じであり、これまで見て来たように、神は目的をもってその試練をあなたに与えておられるのです。もし、間違った選択をするなら、あなた自身がみじめになって行きます。間違った選択をしていることを神が教えてくださっているからです。正しい選択をすることです。すべてのことを神にゆだねてあなた自身は其中で罪を犯すのではなく、神の前に正しいことを行ない続けて行くことです。そうすることによって、神はあなたを祝してくださるしあなたを用いてくださるのです。ぜひ、このヨセフの歩みを覚えて、彼自身がどのような歩みをもって神の祝福をいただいたのか、それに倣って歩んでください。